第１６回　名取川水系河川整備学識者懇談会

議事要旨

開催日：令和８年６月３日（水）

開催時間：10：00～12：00

場所：TKP ガーデンシティ仙台　21F　C+D

（事務局説明を除く質疑応答について記載 ○：委員、●：事務局）

1. 名取川水系河川整備学識者懇談会の規約改正について

○ 規約の改正案について異議なし。

○ 本日６月３日をもって規約改正とする。

2. 名取川水系河川整備計画の変更【大臣管理区間】（素案）について

○ 代替案の比較に際して、流域治水として取り組む田んぼダムや、河口部の広浦・井土浦における遊水地のような効果をどのように評価しているのか。また、里地・里山地域で田畑が荒れているところもあるが、新しく遊水地を造る余地はあるか。

● 代替案を整理する過程で遊水地や放水路の可能性も検討しているが、比較３案はより現実的な案を示している。田んぼダムについては名取川流域においては実績がないこと、定量的な効果の算定が難しいため、比較案の対象とはしていない。

○ 河口部が浅い状態になっていると想定されるが、さらに掘削する施策は考えられるか。

● 河口部の砂州については、東日本大震災による津波で大きく変化したが、現在は形状が安定してきている。出水時にはフラッシュされ、洪水は安全に流下できることから、砂州は良好な状態であると考えている。

○ 自然環境に配慮した掘削について、ある範囲を一気に実施するのではなく段階的に掘削することや、自然の再生力、レジリエンスを活かしたような取組をしてほしい。

● 河道掘削にあたっては、自然を改変することを極力避けたい。上下流バランスを考慮しながら、大規模な改変をしないよう学識者の意見も聴きながら順次進めていく。また、ワンドやたまりなど自然な仕上がりになるよう、生物の定着などモニタリングしながら実施していきたい。

● 鳴瀬川流域のように広域な耕作地があれば田んぼダムの効果が大きそうだが、名取川流域においては厳しそうである。それぞれの流域が持つ特性を踏まえて流域治水対策を設定していくべきである。広浦・井土浦については、環境の観点から水域面積・深さなどを改善していくイメージと考える。

○ 今回の整備計画変更について異論はない。

○ 気候変動の影響について、治水関係は数値でわかりやすく示されているが、利水・渇水については数値が示されていない。気候変動により降雪量が減少し、名取川水系の大倉ダムにおいて自分の試算だと、気温 1℃度上昇すると融雪流出量（大倉ダムへの流入量）が約 10%減り、４℃上昇すると、約 40%減少する。融雪流出量を有効に活用するため利水にも配慮した維持管理をお願いしたい。

○ 山が荒れていると土砂が崩れてくるため、治水と治山をセットで考えることが重要。日が当たらない山になってしまうと下草がなくなり、土が露出すると洪水が生じやすい。そのため、山についても適切な管理をお願いしたい。

○ 代替案については案１で異論はない。

○ 広瀬橋地点については川幅が狭く流下能力が小さいため、流下能力を上げようとすると掘削しかない。洪水と高潮が同時生起すると名取川の洪水が吐けなくなるが、同じように名取川の水位が高いと広瀬川の排水が困難になるため、河道掘削や築堤が必要になる。

○ 名取川では 30～40 年前には砂利採取が行われており、結果的にワンド等の自然環境が生まれてきた。掘削する際には、一気に実施するのではなく部分的に施工していくことで、自然の再生力を活用しながら進めると良い。

● 高潮による河口水位については基本方針の中で検討されている。気候変動を考慮した高潮についてはこれまで生じていないような台風経路等により最悪のシナリオも考えられるが、現状ではこれまでの実測値で最も厳しい条件を採用している。

○ 広瀬川の上流区間について、宮城県としても気候変動を考慮した整備計画変更を考えている。今後、整備計画変更に向けて学識者の意見を伺いたい。

● 当然のことながら、一般市民は管理区間を意識しないため、直轄区間だけでなく指定区間も連続性を持った整備が重要である。

○ 河口付近～合流点付近の汽水域区間を掘削する計画になっているが、この区間の水深が浅いところは漁業資源でもあるヤマトシジミの重要な生息地である。干潟は掘削しないという話だが、海水の入り方や底質が変わるためこれに留意する必要がある。漁協から意見を聴取して掘削を進めていただきたい。

● 河口砂州や塩水遡上の影響、底質の変化を把握していく必要がある。河道掘削の実施にあたっては、漁協とも調整を図りながら濁水の発生抑制、生物の生息・生育・繁殖環境に配慮していく。

○ 掘削断面の工夫を行うことで新たな環境を創出する、また、外来種の侵入を抑制するとあるが、具体的にどのようなことを実施するのか。

● 掘削高を工夫して冠水頻度を高くすることや、掘削面に表土を戻す草地化工法などにより、水生植物帯や自然裸地など良好な環境を形成し、外来種の侵入も抑制していくことを考えている。また、実施箇所はモニタリングをしながら進める。

○ 掘削敷高だけでなく掘削の際に勾配を設けた事例もあるが、考えているか。

● 斜め掘削といった手法なども考えながら検討していく。

○ 外来種の侵入を完全に抑制することは困難である。河川水辺の国勢調査でも外来種のリストアップはでてくるが、それをどう抑制するかはいまだに解決していないことを踏まえると、記載内容については検討が必要ではないか。
● 記載内容について再度検討する。

○ 治水だけでなく環境に関する記述が増えていることは良いことである。

○ 仙台市民にとっては広瀬川がメインであるため関心が高い。広瀬川でアユの斃死が報道されたが、市民からは広瀬川の流量が少なくなっているという声がある。川の流量は生物にとって非常に重要な条件であり、水質、水利用、水利権にかかわる問題を総合的に考えるため、魚や水生生物の専門家も含めて検討していく必要があると感じる。

○ 県の環境審議会では市民サイドから河川の環境がかなり変わっていると発言があった。これまでは国交省、県、仙台市で協力して水質を定期的に検査し、水環境の状況を把握してきたが、これだけでは不十分になってきている。国交省の調査に加えて、市民も調査に協力する体制構築の検討をお願いしたい。
● 秋田県の海岸侵食では、市民が同じ画角で定期的にモニタリングをしている例がある。河川協力団体や役所か、NPO など市民が調査をしていくことはあり得ると思う。

○ PDCA サイクルを運用するにあたっては、これまで実施してきた調査方法が前提となると思われる。具体的な調査方法が記載されていると、より実現性が高い計画となる。

○ 流域治水について、仙台市ではモデル地区として七北田川と梅田川周辺（新田東、田子地区）で田んぼダムや、宅地での流出抑制の実証実験を進めてきている。その事例を基に名取川流域等にも展開していきたい。

○ かわまち事業として藤塚地区の整備を進めている。名取市とも連携しながらにぎわいを創出したい。国交省には東谷地の整備をお願いしているため、引き続き協力しながら進めたい。

○ 国交省の協力を得ながら閖上かわまちテラスを整備できた。観光客も多くにぎわいを創出できている。環境に留意しながら引き続き河川整備をお願いしたい。

○ これまでは洪水被害の事業評価を実施してきたが、今後は環境に関する内容も出てくると、評価は難しい部分はあると思うが、最新の知見等踏まえて引き続き報告をお願いしたい。

3. パブリックコメントの実施について

● 6月中旬から7月中旬にかけてパブリックコメントを実施する。

● これを踏まえて8月下旬に第17回懇談会、11月に整備計画の変更を予定している。

4. 議事全体を通して

● 流域総合水管理のあり方についてという答申が本省から出ている。治水・利水・環境のバランスが最適になるように、東北でもモデル河川から展開していくことを考えている。

－以上－